

令和6年度 蔵王町文化財セミナー

蔵王町十郎田遺跡出土木器と100年前の木地師の記録

(民俗記録映画上映会)

# 奥会津の木地師



制作：民族文化映像研究所 / 姫田忠義 / 撮影地：福島県南会津郡田島町針生 / 1976年 / 55分 / 自主制作  
文部省特選 / 日本映画ペンクラブ推薦 / 1976年キネマ旬報文化映画ベストテン3位

令和6年

11月30日(土)

10:00-11:15 (9:30開場)

会場 蔵王町ふるさと文化会館

ございんホール

蔵王町大字円田字西浦5番地 / 電話 0224-33-2018

入場無料

事前のお申し込みは不要です  
(定員250名・当日先着順)



ございんホール  
Googleマップ



蔵王町の歴史と文化財  
公式ホームページ



Facebookページ

好評  
開催中



蔵王町十郎田遺跡出土木器 / 挽物椀・小皿の荒型など  
鎌倉時代中頃 (13世紀中頃：約750年前、ケヤキ材)

第25回 蔵王町文化財展

※上の写真の木器も  
一部を展示中です

発掘された遺跡から見る 蔵王山麓の暮らし

会期：令和6年10月19日(土)～令和6年12月8日(日)

会場：蔵王町ふるさと文化会館 1階展示室 観覧無料

# 蔵王町十郎田遺跡出土木器と 100年前の奥会津木地師の記録

2007年、蔵王町十郎田遺跡の発掘調査で、鎌倉時代の屋敷跡の一角から180点に及ぶ多量の木製品が出土しました。それはケヤキ材を手斧で荒く整形した椀と小皿の「荒型」と呼ばれるもので、手引きロクロで仕上げる挽物の素材であることが分かりました。材料となった木材の放射性炭素年代測定などから、これらの木器が製作されたのは13世紀中頃と判明。今から約750年前の蔵王山麓で、豊富な木材資源を利用して挽物を生産する木地師たちが活躍していたことを示す貴重な発見です。

これまでの考古学的な知見から、こうした技術は少なくとも約1000年前の古代には成立していました。現在ではほぼ失われてしまった木地師たちのこの手引きロクロによる挽物製作の技術は、電動ロクロが普及する100年ほど前までは東北各地の山間部で脈々と受け継がれていました。蔵王町遠刈田新地の木地師集落にも、同じ頃まで使用された手引きロクロが残されています。

福島県奥会津地方で、手引きロクロによる挽物製作の記憶を留める人々によって再現された木地師の技術を記録した映画が、1976年に発表された「奥会津の木地師」です。本作を見れば、十郎田遺跡の鎌倉時代の木地師と、つい100年前の奥会津の木地師の姿がびたりと重なり、まさに1000年を超す技術の伝統が脈々と受け継がれてきたことを目の当たりにすることができます。

いまでは再現することも難しくなった手引きロクロの技術の貴重な映像記録を通して、蔵王山麓に残された十郎田遺跡の出土木器が持つ意味について考えます。



蔵王町十郎田遺跡で水漬けにされていた木器  
(挽物椀・小皿の荒型など、鎌倉時代中頃)

## 民俗記録映画

# 奥会津の木地師

日本列島には、近年まで移動性の生活をする人々が活躍していた。山から山へ移動して椀などの木地物を作る木地師も、そのなかにあった。

これは、昭和初期まで福島県南部の山間地で盛んに移動性の活動をしていた木地師の家族、小椋藤八さん、星平四郎さん、星千代世さん、湯田文子さんによる、当時の生活と技術の再現記録である。「うつわ一食器の文化」(1975年発表)の制作過程での藤八さんたちとの出会いから生まれた。

この地域はブナを中心にした落葉広葉樹林帯である。藤八さんたちは、ブナを材料とした椀を作っていた。

まず木地屋敷を作る。屋根も壁も笹で葺く、掘立て造りである。家の中には、囲炉裏のある座敷とフイゴやロクロ台などを置く広い土間がある。屋敷ができあがると山の神を祀り、フイゴまつりをする。山の神まつりで藤八さんが唱えた唱え言は、古代のタマフリではないかとみる人もある。谷から水も引いてきた。

椀作りが始まる。男たちは、山へ入りブナを倒し、伐り株に笹を立てて神に祈る。そして、その場で椀の荒型を作る。

倒したブナに切り込みを入れて山型を作り、マガリヨキでそれをはつり起こしていく。女たちが荒型を木地屋敷に運び、椀の外側を削って整形するカタブチ作業、中を削るナカグリ作業と続ける。男たちが、手引きロクロで椀に仕上げていく。

できあがった椀は馬の背で町へ運ばれていく。

人の力で回される手引きロクロは、奈良時代に大陸から導入されたものだという。藤八さんたちは移動性生活をやめ、手引きロクロの作業もしなくなってすでに50年余りたっていた。しかし藤八さんたちの身体には、千年を越す技術の伝統が見事に息づいていたのであった。